

加藤土師萌（1900-1968）

陶芸家の加藤土師萌は、明朝（1368-1644）の失われた技法である「色絵」の再現で知られている。色絵とは、釉薬をかけて高温で焼いた陶器に、色のついた模様を描く上絵付けのことだ。その後、陶器を低温で再焼成し、2層の釉薬を融合させる。

瀬戸に生まれた加藤は、多治見の陶磁器試験場に15年間勤務し、古陶磁の研究や窯業に関するさまざまな技術を習得した。また、1937年のパリ万国博覧会でグランプリを受賞するなど、独自の作品を制作していた。

1940年、横浜に自分の窯を設立した加藤は、明の上絵具の研究を始めた。萌黄金欄手（もえぎきんらんで）や「黄地紅彩（おうじこうさい）」など、明代の代表的な技法を再現することに成功した。1961年には、これらの技法の保存が評価され、人間国宝に認定された。

今回展示されている器は、加藤の「萌黄金欄手」という技術の優れた作品である。淡い緑の釉薬の上に金箔を繊細に貼り付けて鮮やかな色を出している。金粉ではなく金箔を使うには、繊細な技術が必要である。なぜなら、下絵と上絵の融点が近すぎると、金箔が下絵に沈んで見えなくなってしまうためだ。